

幕末から明治時代初期にかけて活躍した人の中で、山岡鉄舟さんについて余り知られていない興味深いお話があります。

愛知県鳴海の知人から、「鳴海の海でも潮干狩りの良い季節になりましたので、お弟子さんをつれて来られませんか」と案内がありましたので、鉄舟は弟子を連れて鳴海に参りました。この潮干狩りは、潮が引いた後、松明と手編み、魚を入れる籠をもつて、向こうずねの半分くらいまで海中にはいつて、松明に集まる小魚を手編みで掬いとるという方法なのです。夕方になり、鉄舟とお弟子さんは、松明を灯して海に入りました。小魚は集まってきますので、手編みで掬うだけです。次から次へと取れるものですから、面白くてたまりません。そうになると、丁度松茸狩りのように、段々一人ひとり離れたくなるものです。そんな時、雨がポツリポツリ降ってきました。夢中になつているときは気がつきませんでした。潮も満ちてきて、向こうずねだったのが、膝頭の所まで上がってきています。大変と気付いたときには、どちらが海岸なのか、どちらが海なのか解らなくなつてしまつたのです。慌てふためいて鳴き出しそうに「先生、先生」と呼ぶお弟子さんに、鉄舟は大声で、「静かに。」目を閉じて耳を澄ませたのです。それは、鳴海の浜千鳥は潮の満ち引きに鳴く、鳴く方が海岸であると。千鳥の声が聞こえ、ようやく海岸に辿り着いたのでした。その事を知人に話しますと、「それは大変なことでしたね。でもよくわかられましたね。」

鉄舟は、浜千鳥のことを話しましたが、知人は「もし浜千鳥が鳴かなかつたら」と。鉄舟は、考え込みました。知人は、「お弟子さんたち、その時松明どうしてしましたか。松明は目先のことを見るときは便利なものですが、それを捨てたらどちらが海岸か海かも解つたでしょう」という話です。

ちよつと考えさせられる話です。

私たちは、いつも自分の考えはいつも正しいと思ひ、又欲望・怨みや妬みなど自己中心的な姿勢で生きています。それを手放せ、手放せばともつと違ふ人生が有るといふのでしよう。しかし私たちにはどうあがいても到底出来る事ではありません。でも出来ない私と気付かせていただいたとき、それはもう阿弥陀如来様の大きな慈しむ心に抱きかかえられ、生かされている身とならせていただくのでしよう。

